令和２年６月吉日

鎌倉楽しむ会の皆様

第二回　紙上散策の資料送付の件

緑深まり精気みなぎる時節、皆様方に於かれましては、ご健康で楽しい日々をお過ごしのことと思っております。しかし、油断大敵！これからは熱中症にも気を付けていかねばなりません。お互いに注意して参りましょう。

つきましては、紙上散策の資料を作ってみました。ご参考になれば幸いです。

場所は江戸時代の明暦の大火（1657）や吉良屋敷討ち入り（1702）、はたまた勝海舟・芥川龍之介・なじみの薄い岡本玄冶など、個々に取り上げても面白い題材がギュッと詰まっている両国・浜町界隈です。

スタートは大江戸線・両国駅となっていますが、例えば、１１時３０分頃ＪＰ両国駅東口からスタートして、名の知れた蕎麦や「玉屋」（03-3631-3844）さんの「元禄二八蕎麦」に舌鼓をうって、時間にとらわれず、ピンポイントをのんびりと散策するのもアリかな？とお勧めします。

また、ＪＲ浅草橋から柳橋を通って、神田川に沿った老舗「梅花亭」の「和菓子」、柳橋のたもとの「小松屋」さんの「佃煮」をちょいとお土産にしたり、隅田川の川風に身を委ねながらのお友達、ご家族での散策もチト粋な感じがしますね！そして、美味しい鳥料理のお店や、浜町公園から久松町～人形町の美味しいお店を探りリラックスするのもお勧めします。

鎌倉楽しむ会としては、ウイルス鎮静化の時には、ご案内したいと思いますが、前以て興味のある方は、この資料を参考にして散策なされても面白いと思っています。

無責任なご案内ですが、安心安全の時が見えた時には、必ずご案内をいたしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

敬具

鎌倉楽しむ会　企画責任者
清藤　孝

“鎌倉楽しむ会”

両国・浜町公園の散歩

- ◆ 集合場所：大江戸線両国駅 A3 表出口
- ◆ 開催日　：202X 年 XX 月 X 日（好日）
- ◆ 集合時間：１０時３０分
- ◆ 解散時間：１４時３０分頃予定／都営浅草線　人形町駅
- ◆ 参加費　：500 円（交通費・飲食代・拝顔入場料などは自己負担）

◆ 散歩コース

（集合）大江戸線両国駅 A3 表出口

1、榛馬場跡（葛飾北斎旧居跡）　2、お江戸両国亭　3、勝海舟生誕の地
4、芥川龍之介　文学碑　5、吉良上野介義央の住居跡　6、吉良家の正門跡
7、塩原橋　8、堅川　9、江島杉山神社　10、一の橋　11、春日野部屋
12、立行司式守家　13、旧国技館土俵跡　14、回向院
15、与兵衛寿し発祥看板　16、大山参詣の水垢離場　17、大高源吾の碑
18、両国橋　19、薬研不動院　20、昭和天皇臨行の碑
21、浜町公園（昼食）　22、清正公寺　23、荒汐部屋　24、明治座
25、賀茂真淵旧居跡　26、笠間稲荷神社東京別社　27、玄冶店濵田家
28、玄冶店の碑

（解散）都営地下鉄人形町駅・日比谷線人形町駅

1、榛馬場跡（葛飾北斎旧居跡）

・この辺りには、練兵場と呼ばれた馬場がありました。本所に住む武士の弓馬の稽古のために設けられ、周りを囲む土手に大きな榛（はんのき・カバノキ科の落葉高木）があったところから、そう呼ばれたようです。
・勝海舟の父・小吉の著書「夢酔独言」の中にも、子供の頃の回想として、榛馬場のことが出てくるそうです。馬場の傍らに祀られていたのが、この榛稲荷神社です。
・葛飾北斎も稲荷神社脇にすんでいたことがあります。との掲示板に書かれています。

2、お江戸両国亭

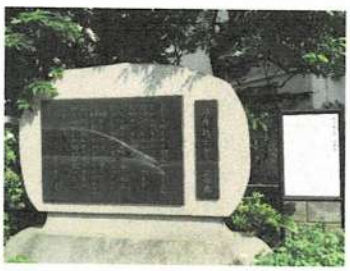
・江戸情緒あふれる街、両国に平成 2 年（1990）オープンした演芸場。毎月 1 日～15 日まで円楽一門会「両国寄席」を中心に、落語、講談、義太夫、小唄、長唄など伝統芸能が行なわれている。

3、勝海舟生誕の地

・勝海舟は、文政６年（1823）１月 30 日、ここ本所亀沢の父・小吉の実家である男谷家に生まれました。初めの名は義邦、幼名を麟太郎といいました。蘭学を修め、西洋の兵学、砲術、航海、測量法などを学び、安政７年（1860）１月、咸臨丸艦長として邦人の手による初の太平洋横断の快挙を成し遂げました。
・慶応４年（1868）３月、高輪の薩摩藩邸において西郷隆盛と会見し、江戸無血開城に成功し、江戸市民を戦場から救いました。
・明治政府にも重用され、参議兼海軍卿・元老院参議官となり、伯爵にもなりました。

（すみだ観光サイトより）

4、芥川龍之介　文学碑



（碑文より）

・芥川龍之介は、明治 25 年（1982）３月１日、東京市京橋区入舟町に新原敬三・ふくの長男として生まれました。辰年辰の日の辰の刻に生まれたのにちなんで龍之介と命名されました。生後七ヶ月の時、母ふくが突然発病したために、本所区小泉町十五番地（現両国三丁目）に住んでいた、ふくの長兄・芥川道章に引き取られ、十三才の時、芥川家の養子となりました。

・芥川家は旧幕臣で江戸時代からの名家で、道章は教養趣味が深く、文学、美術を好み、俳句や盆栽に親しむとともに南画をたしなみ、一家をあげて一中節を習い、歌舞伎を見学するなど江戸趣味豊かな家庭でした。
・本所は龍之介の幼児時から少青年期までの大事な時期を育んだ場所で「大道寺信輔の半生」「本所両国」などの作品に、その一端を見ることができます。
・龍之介は明治 31 年回向院に隣接する江東尋常小学校付属幼稚園に入園、翌年同小学校（現両国小学校）に入学しました。明治 38 年（1905）府立第三中学校（現両国高校）に入学、同 43 年成績優秀により無試験で第一高等学校第一部乙類に入学しました。その後大正２年東京帝国大学英文科に入学、同５年卒業しました。東大在学中、夏目漱石の門に入り同人誌「新思潮」「新小説」に優れた短編を発表して文壇に華やかに登場しました。
・この文学碑は代表作の一つである「杜子春」の一節を引用したものです。この両国の地に生育し、両国小学校で学んだ日本を代表する作家、芥川龍之介の人生観を学び氏の文才を偲ぶものとして両国小学校創立百五十周年の記念事業として平成２年 10 月に建立されたものです。

5、吉良上野介義央の住居跡

・元禄１５年（１７０２）１２月１４日、赤穂浪士四十七士が討ち入りしたところです。吉良家上屋敷は２５５０坪の広さで、建坪は、母屋が３８１坪、長屋は４２６坪でした。
・吉良家は、清和天皇の後裔で、江戸城における一切の典礼を司る高家の地位にありました。有職故実の家柄として重用され、賓客を応待することにかけては吉良上野介義央は天才であったということです。

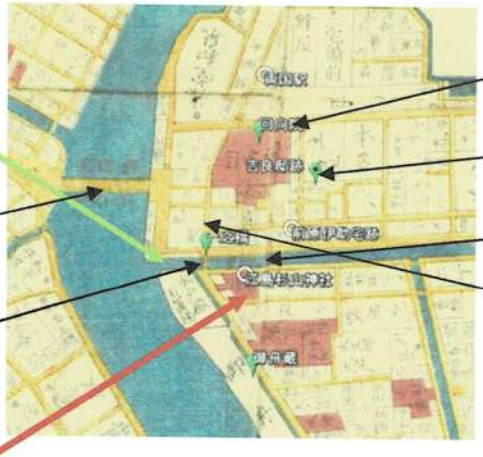
6、吉良家の正門跡

・この辺りに吉良邸正門がありました。
元禄 15 年（1702）12 月 14 日寅の刻（午前 4 時）の七つ鐘を聞いた後、正門から大石内蔵助以下二十三名が用意した梯子で邸内に侵入して、内側から門を開け、「浅野内匠家来口上」を玄関前に打ち立てて乱入しました。
・赤穂浪士は正門、裏門の二手に分かれて討ち入り、大声をあげながら百人以上の大勢が討ち入ったように装いました。これに動揺した吉良家家臣の多くが外に飛び出そうとしました。しかし、弓の名手、早水藤左衛門らが侍長屋の戸板に向かって次々と矢を射掛けて威嚇し、出口を固められたため、飛び出すこともできず戦闘不能になったと言われています。

7、塩原橋

・掲示板より
江戸時代末、「本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名炭屋塩原」と謳われた塩原太助が、この辺りに住んでいたことから、それに因んで付けられたものです。
・太助は上州（群馬）沼田から江戸に出て薪炭商人として成功したのですが、その立志伝は明治の初め南二葉町（亀沢 3 丁目）に住んでいた「三遊亭圓朝」によって人情噺に仕立てられ、その後、浪花節や演劇にもなりました。
・歌舞伎の「塩原多助一代記」は明治 25 年に初演され、愛馬の別れで大変な評判をとったそうです。
・天明元年（1781）当時、本所相生町（両国三丁目）に住んでいた太助が亀戸天神に寄進した燈籠は、今も境内に残っています。

8、堅　川



9、江島杉山神社

「えじますぎやま」神社といいます。江ノ島弁財天（市杵島比売命）と鍼術の神様・杉山和一（１６１０～９４年）総検校が祀られています。弁財天はすべての願いを叶えてくれる神様ですが、特に芸能上達に通じています。杉山総検校は、鍼の神様、視覚障害者の先駆者で、視覚障害者に鍼・按摩を職業として与えてくれた人として尊敬されています。江ノ島弁天の岩屋にこもり鍼術の一つである管鍼（くだはり・かんしん）術を授かりました。徳川５代将軍綱吉公の治療に当ったことにより、元禄６年（１６９３）に１８６０坪の屋敷を賜い、弁財天像と弁財天の社地を下賜された。

10、一の橋

江戸時代からの橋ですが、吉良上野介義央のあだ討ちを果たし、義央の首級を主君浅野内匠頭の墓前に捧げるため持参して通った最初の橋である。

11、春日野部屋

12、立行司式守家

両国界隈は江戸時代から、回向院で勧進相撲が開催されていたので、相撲部屋が沢山あります。また、近くには立行司式守家もあり、地方巡業のない両国の本場所の時などは、粋なお相撲さんの浴衣姿をみかけるそんな光景は普通です。また、少し離れていますが、珍しい足袋やさん（喜久屋）もあります。

13、旧国技館跡

・案内掲示板より

・旧国技館は天保４年（1833）から回向院で相撲興行が行なわれていたことから、明治 42 年（1909）に、その境内に建設された。建設費は 28 万円（現在の価値では 75 億円程度）ドーム型屋根の洋風建築で、収容人員は一万三千人でした。開館当時は両国元町常設館という名称でしたが、翌年から国技館という呼び方が定着し、大鉄傘と愛称されました。

・しかし、東京大空襲まで、三度の火災に見舞われるなど御難続きで、戦後は進駐軍に接収されました。返還後は日大講堂として利用されていましたが、昭和 58 年（1983）解体されました。

・左手奥の両国シティコアビル中庭の円形は、当時の土俵の位置を示しています。

14、回向院

・江戸時代「振袖火事」の名で知られる明暦の大火があり、市街地の６割以上が焼土と化し、１０万人以上の尊い人命が奪われました。この災害により亡くなられた人々の多くは、身元不明の人々でした。当時の将軍家綱は、このような無縁の人々を手厚く葬るようにと、隅田川の東岸のこの地を与え、「万人塚」という墳墓を設け、導譽上人に命じて無縁仏の冥福に祈りささげる大法要を執り行いました。このとき、お念仏を行じる御堂が建てられたのが回向院の始まりです。

・境内堂宇に安置されている観世音菩薩や弁財天などは江戸庶民に尊崇され巡拝の札所となりました。江戸中期からは、全国の有名寺社の秘仏秘像が御開帳される寺院として賑わいました。

江戸後期には勧進相撲の定場所となり、明治末期まで７６年間開かれ日本相撲史に刻まれています。また、鼠小僧次郎吉が供養されているのでも有名です。

15、与兵衛寿し発祥看板

・この横丁の左手に、江戸握り鮨発祥といわれる与兵衛鮨がありました。文政の始めに、初代・小泉与兵衛（1799～1858）により大成されました。
・小泉与兵衛は、霊厳島の生まれでしたが、次々と商売を替えて、本所で暮らすようになりました。その頃に、大阪風の押し鮨にあきたらず、これを江戸風に鮮度を保ち、手早く作る方法を工夫しました。始めは、毎日岡持ちに鮨を入れて売り歩きましたが、評判を呼ぶようになり、屋台を出し、後には店舗を開くほどになり、殺到する注文に追いつけない繁盛ぶりだったと伝えられます。
・当時の狂歌にも「鯛比良目（ひらめ）いつも風味は与兵衛ずし買手は見世にまって折詰」などと人気のほどを伺うことができます。
・また、食通の武士の注文に応じて与兵衛が創案した「おぼろの鮨」も大変な人気となりました。屋台で山本のお茶を出したことも人気に拍車をかけました。
・以後、昭和五年に惜しくも廃業しました。

（墨田区教育委員会掲示板より）

16、大山参詣の水垢離場

・江戸時代は、相模国（今の神奈川県）の大山詣りが盛んで、この場で水垢離し身を清めて行者姿となって出立していった場所跡です。

17、大高源吾の碑

・大高源吾は赤穂浪士の一人。大石内蔵助の信任厚く、江戸では脇屋新兵衛と名前を替え、吉良家の情報を探った。源吾は文雅にたしなみ、俳号は「子葉」といい、松尾芭蕉の門人・宝井其角とも友好関係にあり伏見稲荷の神官・荷田春満（かだのあずままろ）とも親交があったという。
・そして、吉良家に出入りする茶の宗匠・山田宗偏に弟子入りし、吉良家の茶会の様子から、吉良義央の在宅を確認し、この情報をもとに、討ち入り日を決めたと言われています。

18、両国橋

・江戸時代、隅田川には防衛上の理由から、千住大橋以外の架橋は認められなかった。そんな中、明暦3年（1657）に振袖火事があり、江戸市中の大半を焼き尽くし、逃げ場を失った多くの人が犠牲となったことが、両国橋を架橋するきっかけとなった。
・両国橋の当時の正式名は「大橋」でしたが、武蔵国、下総国にかかる橋であったから「両国橋」という俗称があり、これが後に正式名となりました。
・享保17年（1732）全国的に大不作に見舞われ大勢の餓死者と、さらに江戸ではコレラの大流行で死者が出た。
・八代将軍吉宗公は、翌年享保18年（1733）旧暦の5月28日、悪疫退散祈願と犠牲者の霊を慰めるために両国橋付近で、水神祭の川開きに合わせて「花火」を打ち上げました。これが、今日に「隅田川花火大会」の起源です。

19、薬研不動院

薬研不動院の縁起（ホームページより）
・ご本尊の「不動明王」は、崇徳天皇の代、保延3年（1137）に真言宗中興の師・興教大師「覚鑁（かくばん）」上人が、43才の厄年を無事にすませた御礼として、一刀三礼敬刻され紀州根来寺に安置されたものです。
・その後、天正13年（1585）豊臣秀吉は根来寺を焼き打ちにした際、大印僧都（だいいんそうず）は、その尊像を葛籠（つづら）に納め、それを背負って東国に下りました。
・そして、隅田川のほとりを有縁の霊地と定め天正19年（1591）そこに堂宇を建立しました。
・境内は、順天堂の学祖と仰がれる「佐藤泰然」が、天保9年（1838）に和蘭（オランダ）医学塾を開講した場所でもあります。

20、昭和天皇臨行の碑

・大正12年9月に起こった関東大震災に帝都東京も、未だかってない大災害となったが、7年の歳月をかけ復興を果たした。昭和5年（1930）3月24日、昭和天皇は復興帝都を巡行され、当学校の三階の御座所にて休憩され、復興功労者に直にお会いされ、お言葉をかけられた。
・その臨幸された時の記念碑です。

21、浜町公園

・江戸時代は、熊本藩主・細川氏の下屋敷があり、明治以降も細川家の邸宅があったが、大正12年に発生した関東大震災により壊滅的な被害を受けた東京の復興事業の一環としての公園が計画された。その後、公園として完成したのは昭和9年（1934）のことである。

22、清正公寺

・浜町公園の一角にあります。由緒は、文久元年（1861）に、熊本藩主・細川斉護が、熊本本妙寺に安置する加藤清正公の分霊を勧請して、下屋敷に創建、明治維新には加藤神社となったが、明治18年には仏式に戻り、管理を熊本本妙寺に委託し、本妙寺別院となって、今に至っています。

23、荒汐部屋

・時津風部屋の分家、元小結の大豊（おおゆたか）が平成14年に開いた相撲部屋。現在は元前頭蒼国来が継承している。

24、明治座

明治座

・江戸時代末期に両国にあった菰張芝居（こもをめぐらせただけの芝居小屋）が出発。それから、喜昇座、久松座、千歳座と代わり、初代市川左団次が千歳座を買収し座元となり、これを「明治座」と改称し、今日に至っている。
・平成5年（1993）には再開発で建替えた賃貸オフィスビル浜町センタービルの低層階で興行することになった。
・社長は玄冶店濵田家の社長三田芳裕が兼務している。

25、賀茂真淵旧居跡

・元禄10年（1697）遠江国（浜松市）生まれ。代々地元の賀茂神社神主を務める家柄。享保18年（1733）上京して国学者の荷田春満に入門。春満の没後は江戸へ出て「源氏物語」「万葉集」の講義や歌会などを主催し、学者としての評判も次第に高まっていった。延享3年（1746）50才のとき、吉宗の次男田安宗武に仕える。この間数多くの学書を執筆、国学者としての地位を確立した。
・隠居後は明和元年（1764）68才で、江戸浜町に田舎風の庵居（県居・あがたい）を営み、門人を相手に雅事専心の毎日を送った。門流では、加藤千陰、村田春海をはじめ本居宣長、荒木田久老らが有名です。明和6年（1769）没

26、笠間稲荷神社東京別社

・江戸時代の延宝九年（1681）に牧野成貞が将軍綱吉から、成貞の妻・阿久里と綱吉の関係からか、2万1千坪の土地を下屋敷として拝領し、その邸内社でした。廃藩後は牧野邸は本所に移りましたが、お社は、笠間の本社が奉祀する所となりました。

27、玄冶店濵田家

・「濵田家」の名は、花街と知られた芳町（現在の人形町周辺）の芸者置屋「濵田家」に始まります。
・「濵田家」の芸者貞奴は日舞に秀で、彩色兼備の誉れが高く、時の総理・伊藤博文など名だたる元勲からも贔屓にされ名実ともに日本一の芸者として知られるようになったといいます。のちに彼女は、日本初の女優、川上貞奴としても名を馳せます。
・置屋としての「濵田家」は明治の末に店を閉じます。しかし、当社の創業者である三田五三郎が、大正元年に開業する際、貞奴から由緒ある「濵田家」の名を譲り受けたことにより、料亭「濵田家」が誕生します。

＊「濵田家」ホームページより＊

28、玄冶店の碑

玄冶店（げんやだな）跡・
・江戸時代初期、新和泉町（人形町三丁目）のこの辺りは、幕府の医師であった岡本玄冶の拝領屋敷があったことから「玄冶店」と呼ばれていました。
・岡本玄冶（1587～1645）は京都に生まれ、医術を曲直瀬玄朝（まなせげんちょう）に学びました元和九年（1623）、京都に上洛中の徳川家光が江戸へ帰る際に侍医として招かれ、幕府の医師となりました。
・岡本玄冶の拝領屋敷は坪数千五百坪あり、当地に九代にわたって子孫が住み、明治維新で地所を奉還したと伝えられています。玄冶は正保2年（1645）に没し、広尾の祥雲寺（渋谷区）に葬られました。
・祥雲寺は、福岡藩主・黒田忠之が父・長政を弔うため建立しました。黒田家に縁のある数々の大名や武家の墓所となっています。また、曲直瀬一族の墓所にもなっています。

完

東京都墨田区千歳1丁目　付近

1：7,900 相当

地図上の1センチは 約 79 メートル

印刷中心は 東経 139度47分25秒　北緯 35度41分28秒

「夏越の祓い」について

医術の発達していない太古の時代から「疫病」の蔓延は、人間の世界では大変な脅威であったことと思われます。多くの疫病の原因は、自分たちの日頃の行いの中に、悪い行いがあったことが、その報いとして神罰の形で現れたと考えていたようです。

そして、この疫病が流行った時には、神に祈る巫女の神懸かり等により疫病退散の神事を行ってきたのです。それが平時でも神事として定着したのが、歴史的にみますと、飛鳥時代の後期・天武天皇の御代から朝廷が行う公式行事として定められてきた。

室町期の応仁の乱により、京の都が荒れ果てた時には、伊勢神宮の遷宮祭も休止に追い込まれたように、朝廷においてもあらゆる神事が停滞します。それも徐々に復活してきたのは、宋船貿易などの貨幣経済の浸透により庶民の中から成り上がり者が発生してきたからと考えられます。

さらには、戦国時代を経て、この神事の形が庶民にも定着してくるのは江戸時代も中期以降に入ってからと思われます。また、寺子屋などの普及により庶民の読解力も向上し、奈良時代初期の「備後国風土記」の逸文の素戔嗚尊（すさのおのみこと）と蘇民将来（そみんしょうらい）も「疫病退散」の行事に組み込まれてきたようです。

以上のことから考えるに、現在の神事「夏越の祓い」は、その土地の神社に於いて、一年の前半の最後の日、一年の折り返しとなる日に行われます。
中身は、日々の暮らしの中で、気が付かないうちに、物を粗末にしたり、神仏を敬わなかったり、邪推したりといった穢れを祓う神事になってきました。大きな神社は「茅の輪くぐり」神事で穢れを祓い、また、「形代（かたしろ）」に自分の悪いところを撫で、それに息を吹きかけ体内の邪鬼を祓うということも行っています。

令和二年は、特に新型ウイルスの原因とする疫病退散が非常に難しい世界中が大騒乱に陥っています。まだまだ油断が禁物です！

この際、お近くの神社に向かわれ「夏越の祓い」をなされるのも、ご自分のこれからの「疫病退散」につながるものと思います。お勧めいたします。

＊　神歌　＊

「水無月の夏越の祓いする人は
千歳の命　延というなり」

以上

令和２年６月２５日

鎌倉楽しむ会　企画責任者　清藤孝　記